

豊岡市教育研修センターだより

豊岡市教育委員会 R8(2026).9.1

No.8

豊岡市のホームページにもアップしています。

豊岡市 HP→上段「暮らし」→右下「教育・学校」→「教育研修センター」へ



豊岡市教育フォーラムより

教育フォーラムの経緯・意義について～東井教育の不易の教育観を大切に、確認し合う研修会～

1市5町合併後、教育観を共通して貫くものが必要だと考え、東井教育を軸とした。

- ① 「子どもの事実学び、子どもに寄り添う教育」…子どもの考え方、感じ方、思い方、行動の仕方等は子どものいのちの現れ、そのいのちに触れ、磨き、育てるのが教員の仕事であり、これは教育の不易。
- ② 自分にはよいところがある、先生は自分の良いところを認めてくれていると思う子どもたちは約9割。先生方のかかわりの賜物。今回は、非認知能力向上事業について、「観て、聴いて、感じて」学ぶ。

第1部：演劇ワークショップって？

- (1) 導入の背景：家庭環境や体験機会の格差に伴う課題に対し、やり抜く力や協働性といった「数値で直接測りにくい能力（非認知能力）」を育てる目的で開始。
- (2) 取組と成果：小中一貫教育として、小6、中1を対象とした演劇的手法を取り入れた授業の成果をベースにアウトプット型の演劇ワークショップ（小1、2対象）を柱に進める。
学校生活に前向きになれなかった児童が主体性を発揮したり、自分の考えを深める子どもの割合が導入当初より25ポイント上昇したりするなどの成果を確認し、市全体に展開。
- (3) 今後の展開：試行錯誤を重ねながら自然学校や体育祭などの全教育活動へ活用を拡大。資金面ではクラウドファンディング等も活用。正解が一つではない課題に対話を通して向き合う力を育む。



第2部：参加型ワークショップ体験

- (1) プログラム1：「一言だけ」の表現に始まり、その場にいること自体を尊重する自己開示の入門。
- (2) プログラム2：身体を動かしながら自分と他者との共通点や違いに気づき、自己表現を深める。
- (3) プログラム3（中学生向け）：即興演劇を通じ、フィクションの中で互いの表現を受け止め合い、安心して挑戦できる空気を作ることを体感。

第3部：シンポジウム「非認知能力向上推進事業による豊岡市の子どもの変容について」

- (1) 子どもの変化：演劇ワークショップの中で認められた成功体験が自信となり、通常の授業でも自分からアイデアを出したり他者を肯定したりする姿勢が定着してきた。
 - (2) 教員の意識改革：ファシリテーターの関わり方を手本に「否定せず受け入れる声かけ」や「子どもを一律に見取らない視点」を学ぶ。自身の授業分析にも積極的に取り組む。
 - (3) ファシリテーターによる関わり方の工夫：
 - ・過剰に介入しない：あえて口を出しすぎず、失敗や試行錯誤を通じた成長を促す。
 - ・存在そのものを肯定する：発言が少ない子や目立たない動きをする子の行動も一つの表現として価値づける。
 - ・絶え間ない自己観察：声のトーンや言葉かけのタイミングを振り返り、子ども主体の場づくりを徹底。授業に通じる視点であることの共有。
 - (4) 保護者の理解：授業参観を通じて演劇ワークショップ（非認知能力の向上）の意義が浸透し、「子どもの自己肯定感の醸成」、「子どもにとって安心できる居場所がある」と肯定的な評価が広がっている。
- ※「ありのままを受け入れる環境」を整えることで、子どもたちの非認知能力だけでなく、教員自身の指導力や見取りの力も高まる相互の学びが生まれている。

【参加者の声】（一部抜粋）

- ・「なぜ演劇ワークショップなのか。」については、保護者のみならず、私たち教職員にとっても明確ではない状況だったのではないかと思います。今回のフォーラムで、各校3割程度の職員の出席だったが、嶋前教育長のお話により、演劇ワークショップ導入に至った経緯と効果等を再確認させていただくことができた。参加者も、今後のワークショップへの思いも変わっていくのではないかと思います。固定的になりかける児童理解を、いつも多面的に、そして肯定的に活動時や振り返り時に教えていただき、子どもの見とりの幅を広げていただいている。「そこにいるということに価値がある」「失敗が人を成長させる」「次どうするかという時に力を発揮する」「コントロールしていないようにコントロールする」等、私たちが教育活動を行っていくときにも忘れてはいけない言葉を伝えていただいた。
- ・フォーラムを通して感じたのは、非認知能力という言葉が学校現場で言い続け、意識し続けることで、まず教師が変わり、その変化が子どもに伝わっていくということである。教師の変化は、プロのファシリテーターから学んでいることも多いと思う。子どもは本来、可能性の宝庫だが、その可能性に気づき、認め、引き出していく教師の力が無ければ、伸びるものも伸びないのだと思う。演劇ワークショップで、普段は見られない子どもの姿が現れ、それを教師が見取ることの大切さが何度も語られていたことが心に残った。一方で、教師がそのような力を身につけるには、やはり研鑽が必要である。日々の授業や子どもとの関わりを振り返り、学び続ける機会や仕掛けが求められているのだと感じた。演劇ワークショップはこどものためだけではなく、教師自身が学ぶ場であるという話には、大きくうなずかされた。
- ・深まった学びや気づきが大きく2つある。1つ目は「ファシリテーションマインドの重要性」。これまではワークショップの際、児童の様子ばかりに目を向けていたが、6月に実施されたワークショップでは、児童の表情だけでなくプロのファシリテーターの動きや言葉掛けを意識的に観察することで、ファシリテーターの関わり方や評価の視点が、いかに子どもたちの安心感や挑戦意欲を引き出しているかに気づかされた。一見、不器用に見える子どもの表現であっても決して否定せず、児童の世界観を尊重して肯定的に価値づける姿勢や、安易に介入せずあえて失敗させる（トライ＆エラー）ことで次の自発的な行動へとつなげる関わり方は、日常の授業において我々教師が持つべき「ファシリテーションマインド」そのものであると実感した。「ワークショップは子どものためでもあるが、教師のためのものでもある」という言葉を今後も大切にし、見る側の視点を明確に持って参観し、自身のファシリテーションマインドをより一層磨いていきたいと思う。2つ目は、「日常の授業や学級経営に活かす」。今回のフォーラムで、演劇ワークショップは単なるイベントではなく、日常の授業や学級経営の土台を形作るものであると再認識することができた。演劇的な手法を無理に教科指導に取り入れる必要はなく、教師が子どもたちの関わりや挑戦しようとする芽を見逃さずに承認すること、そして子ども同士が互いを認め合える安心・安全な学級集団を創り上げていくことこそが大切だと感じた。また、演劇のようにアウトプットする活動が非認知能力の育成に絶大な効果をもたらすことを考えると、豊岡市が力を入れて取り組んでいる主体的・対話的で深い学びを目指したアウトプット型（後半重視型）の授業実践もまた、非認知能力の育成に直結しているのではないかと考えた。そして、非認知能力の育成が、結果として認知能力の定着にも大きな相乗効果をもたらすという強い確信を得ることができた。

【豊岡市教育委員会より】

今年度は、研修の内容も大きく変わりました。本フォーラムは、「子どもの学びと大人の学びは相似形」であるように小さなチャレンジを重ねていくことで豊岡市の教育が、より効果的に子どもに届くことを願いとしています。保護者・地域の方への参加も呼びかけました。参加いただいた方は、少数ではありましたが、これも小さなチャレンジの一つだと考えています。

改めまして、豊岡市が大切にしている「子どもの事実に関わり、子どもに寄り添う保育、教育」、そして非認知能力向上事業について多くの学びを参加者の皆さまと共有できたこと、感謝いたします。

先生方の地道で丁寧な取組が、豊岡の子どもたちの未来を創ることにつながります。

第5次とよおか教育プランの基本理念、「豊岡で育む『在りたい自分』と『在りたい未来』を創造する力」の実現に向けて、学校、家庭、地域が手を携えて、子ども達の学びを丁寧に支えていきましょう。

今回は、本フォーラムの内容を抜粋した動画を期間限定で配信しています。（市内の先生方のみ）

ぜひ、参加された先生方はもちろんのこと、自校の若い先生からベテランの先生まで本フォーラムの内容について共有いただきますようお願いいたします。